

潜伏キリシタンの伝承物語『天地始之事』（その2） “Tenchi Hajimari no koto”: A Legend of Underground Christians in Nagasaki (2).

梶田 叡一
Eiichi Kajita

キーワード：潜伏キリシタン キリスト教の日本への受容 物語の構造分析 宗教心理

潜伏キリシタンの伝承物語『天地始之事』の基本性格や、この物語が発見された経緯などについては前稿で述べた⁽¹⁾。本稿では、その内容の全体像について検討する。

【『天地始之事』を構成する6つの大物語、17のエピソード】

『天地始之事』には、様々な要素が入っている。旧約聖書や新約聖書の内容、キリシタンの教義、宣教師が伝えた南欧の説話、山伏等が持ち込んだ日本伝来の民俗宗教的要素、潜伏していた時期に外面的に所属していた佛教寺院の教義や習俗、日常生活をしている在地の民間説話、等々である。

こうした諸要素が数多くのエピソード（小物語）の内容を彩り、それがまた一つのまとまった主題ごとに17の物語となっている。これらの物語群は、更に大きく纏めるならば、付録的な最終部分を含め6つのテーマの大物語を構成していると考えてよい。『天地始之事』という伝承物語は、このように、大中小3段階の物語が組み合わせられた形で構成されたもの、と考えることができるのではないだろうか。

このような捉え方をするならば、『天地始之事』の全体は次のような物語群によって構成されているとしてよいであろう（各物語の末尾の〔 〕内に、その物語を構成するエピソード=小物語の数を示しておく）。

1. 天地創造と人祖らの物語

- (1) デウス（天帝）による世界の創造 [2エピソード]。
- (2) 人祖アダム、エワの創造と、彼ら一家の生活 [2エピソード]。
- (3) 墮天使=天狗（悪魔）ジュスヘルの暗躍と、エワ、アダムの誘惑、パライソからの追放 [8エピソード]。
- (4) 人々が増え、墮落し、大津波が来て帝王パッパマルジ父子だけ生き残る物語 [4エピソード]。

2. 御母マルヤの物語

- (5) デウス（天帝）の御子の母親として選ばれた処女マルヤの物語 [5エピソード]。
- (6) マルヤによる御子の御懐妊と御誕生 [5エピソード]。

⁽¹⁾ 梶田叡一「潜伏キリシタンの伝承物語『天地始之事』」奈良学園大学紀要第3集、2015年9月、29～37

3. 御主イエスの御誕生と御成長

- (7) 御誕生後の御主の様子と逃避行の物語 [7エピソード]。
 (8) 御主の受洗と学問の物語 [3エピソード]。
 (9) 御主がガクジュランの所で仏法を論破し弟子ができる物語 [6エピソード]。
 (10) 帝王ヨロウテツが御主を殺そうとして数万の幼子を殺す物語 [2エピソード]。

4. 御主イエスの御受難と勝利

- (11) 御主が弟子ジュウダツに裏切られ密告される物語 [3エピソード]。
 (12) 帝王ヨロウテツに御主が捕縛され苦難を与えられる物語 [4エピソード]。
 (13) 御主のカルワ竜ヶ嶽での最後の御受難と御死去の物語 [6エピソード]。
 (14) 御主の御出現と御昇天の物語 [2エピソード]。
 (15) 御母マルヤを初めとする御主ゆかりの人達の天での処遇の物語 [5エピソード]。

5. この世の終わり

- (16) この世の終わりと最後の審判の物語 [3エピソード]。

6. 死後の世界について

- (17) [追加] 死後の世界における罪の償いの火の物語 [1エピソード]。

【各物語で何が語られているか】

こうした物語の全体を通じて、主として何が語られているかを見るため、『天地始之事』に出てくる主要な言葉を、各物語ごとに整理してみることにしたい。

物 語	デ ウ ス ・ 天 帝	ジ ジ ス ユ ス ・ 御 主 身	マ ル ヤ ・ 御 母	ジ ユ ス ヘ ル	天 狗 ・ 悪 魔	ア ア ル ン カ ン ジ ン ジ ヨ ヨ	パ 極 ラ イ ソ ン ・ 天 国 楽	ベ イ ン ボ ウ ヘ ・ 地 獄 ノ	中 天	フ ・ ル カ ト 煉 ウ リ ヤ 獄	帝 王 ヨ ロ ウ テ ツ	帝 王 ゼ ジ ユ ウ ス	バ ・ ウ チ 御 ス モ 水
(1)	2	-	-	1	-	1	1	1	-	-	-	-	-
(2)	3	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
(3)	19	-	-	14	2	5	3	-	4	-	-	-	-
(4)	4	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
(5)	5	1	14	-	-	3	-	1	-	-	-	12	1
(6)	-	8	14	-	-	2	-	-	-	-	-	2	-
(7)	-	7	3	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-
(8)	2	8	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	3
(9)	1	12	1	-	-	-	5	1	-	-	1	-	5
(10)	1	4	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-
(11)	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-
(12)	1	11	-	-	-	-	-	2	-	-	4	-	-
(13)	-	7	2	-	-	-	-	1	-	-	3	-	-
(14)	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(15)	2	4	4	-	2	-	5	3	-	2	1	1	-
(16)	4	-	-	-	3	-	2	2	-	-	-	-	2
(17)	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-
総計	45	67	39	16	7	11	20	12	4	3	19	15	11

この表にまとめられたところからも明らかなように、『天地始之事』で最も多く語られているのは、ジスウス（御主・御身＝イエス）であり、11物語で67回も言及され、第6～第14の物語の主人公となっている。また、デウス（天帝）が12物語で46回言及され、第3物語では中心的な位置を占めている。マルヤ（御母＝マリア）は7物語で39回言及され、第5物語と第6物語では主題としての位置を占めている。ここから、ジスウスが『天地始之事』の物語全体を構成する主人公であるのは明かであり、副主人公としてデウスとマルヤが配されている、と考えてよい。潜伏キリシタンにとって最大の関心事はやはり御主ジスウス（イエス）であり、彼との関係における天帝デウスと御母マルヤであった、ということであろう。

パライス（天国・極楽）は9物語で20回語られており、これに対してインヘルノ（リンボウ・地獄）は10物語で12回である。パライスに行くかインヘルノに落ちるか、ということがキリシタンの抱く「救い」の観念の中心を占めていたことを考えると、この頻出の仕方は当然のことと言ってよい。

バレンの帝王ヨロウテツの名前も頻出し、7物語で16回である。この帝王は御主ジスウスの中心的迫害者として位置付けられており、御主ジスウスの受難物語の一方の主人公である。また、ロソンの帝王ゼジュウスの名前は、3物語で13回出てくる。この帝王は御母マルヤを恋慕する男（最終的には結婚）という位置付けであり、マルヤの物語の大事な1要素となっている。

キリシタンの宗教的習俗の中心を占めるバウチスモ（洗礼）が4物語で10回、オラショ（祈り）が7物語で9回出てくる。神話を含め人々の間に伝承されてきた物語が、その時に生きている人々が現に行なっている習俗を意味づけ基礎づけるものであることを考えるなら、潜伏キリシタンの宗教的アイデンティティの維持にとって、これらが繰り返して語られるのもまた当然のことであろう。

【田北耕也の全体的意味付けをめぐって】

田北耕也も『天地始之事』全体の中で主要な言葉がどの位の頻度で現れるかを検討し、それによってこの伝承物語の全体的性格を次のように概括している⁽²⁾。

信仰と、信仰にもとづく来世への明るい希望とを与えるキリストの教え、即ち永遠の生命が、この世における肉体の生命より尊いという教えによって、キリシタンは死の迫害をのりこえて殉教することもできた。死なずに隠れて生き続けたキリシタンは、この信仰と希望を、どのように保存し伝承していたか。それを土民的な言葉で語るのが『天地』である。

この物語にあらわれてくる用語の種類とその頻度を左に掲げ、キリスト教の一神教的性格、託身の玄義、原罪説、救済観、道徳、世界性等保存の仕方を概観する。

こういうことで、キリスト教の根幹となる大切な教義的考え方が、『天地始之事』全体の中でどのように保存されているかを、キーワードとなる言葉の出現頻度を数えていくことで検討していこうとしたわけである。言葉の数え方が私の場合とは少し相違しているので数字には多少の食い違いはあるが、田北耕也は以下のように主張する。

（1）全編を通してデウスという言葉が43回、デウスと同義の「おんあるじ」が23回、計66回、即ち底本1頁あたり1回半以上の頻度で、始めから終わりまでほぼ平均してあらわれるが、これは神の支配が世界と人生とを一貫し

⁽²⁾ 田北耕也の『キリシタン書・排邪書（日本思想大系25）』岩波書店（1970年）、「収載 書目解題（天地始之事）」における記述。p633～634。

ているという信仰の表現であり、多神教とも汎神論ともシンクレタイズしなかった一神教的性格を物語るものである。

田北耕也はキリスト教の一神教的性格がこうした形で保存されている、と主張するわけであるが、この結論の出し方は少し性急ではないか、というのが私の率直な印象である。全編を通してみると、ジュスヘルは神に逆らう形で大いに暗躍しているし、人間界でも帝王の意思が大きな支配力を持っている。「神の支配が世界と人生を一貫している」と本当に言い切ってよいかどうか、ということになるのではないだろうか。またシンクレティズムでない、という田北耕也の主張も、デウスという言葉がどのような意味付けで、また何との組み合わせで出されているかを見ていかないと、成立しないであろう。

(2) 「丸ヤ」と「ビルゼン」の出現頻度が合わせて45回、これは神が人間の形をとってこの世に下るという託身の玄義を、マリヤによる処女降誕という形で物語るものであり、日本の大衆にこれをアピールするため長々と述べているものである。

田北耕也のこの主張も、キリスト教の教義がこの物語の中にきちんとした形で保存されているはず、という前提でしか読もうとしないものであり、その意味では性急な結論づけである。マリヤ（丸ヤ）と処女（ビルゼン）の言葉は全編にわたって出てくるわけではなく、御主の出生前後と生育の過程、そしてマリヤが天に上ってからのところにしか出現していない。特別に長々しく語られているという印象もなく、また大衆にアピールするようにと工夫されたような語り方でもない。さらには、出生した御主は神そのものであるとか、丸ヤは処女であったなどという点については、新訳聖書ほどには強調されていない。それに丸ヤは後に天に上り、自分を恋い慕って死んでいったロソンの帝王と天帝の御助けを得て夫婦になるということを考えると、託身の玄義を処女マリヤによる神の子降誕の形で考えるというストーリーの立て方とは、少なからぬ感覚的ズレがあるのではないだろうか。

(3) 「エワ」が37回、「アダン」が16回出現するとするが、これは、この世の苦しみは神への不信・不従順から来るという旧約聖書的な原罪論が、長文の戯曲もどきに描かれているためである。

田北耕也のこの主張も、キリスト教の教義がこの物語の形で保存されているという前提に立った強引な引き寄せ的解释のように思われてならない。エワやアダンが神の禁じたマサンの実を食べてパライズを追放されたことは述べられているし、またそれが神に対する不従順であることも描かれているが、これが後の人達に至るまでの（この世での苦しみの根本原因となる）原罪となっているとは必ずしも語られていない。河合隼雄も「実をいいますと『天地始之事』の中では原罪がなくなってしまうんです」と語っている⁽³⁾。やはり強引過ぎる主張と言うべきではないだろうか。

(4) 天国や極楽を意味する「パライズ」が22回、これにくらべて地獄やそれを意味する「イヌヘル」などは和洋両語を合計して6回に過ぎない。天国に入る希望によって迫害に耐えたキリシタンであり、現世利益本位の日本民俗信仰と異なる点である。

田北耕也のこの主張も、誤解を招きかねない強引なものと言わねばならない。日本の民衆が持ち続けてきた信仰は、少なくとも中世から現代に至るまで、現世利益と来世の幸せとの双方を追い求めるものであったと言っても過言ではない。その点では、江戸時代中期から末期、そして明治維新の後でも、潜伏キリシタンや隠れキリシタンの信仰も他の仏教徒などを標榜する人達の信仰も、大差なかったと見るのが自然ではないだろうか。神仏のバチやタタリを恐れ、同時に神仏のオカゲで良いことがあるよう祈り求める、という現世利益の面と、死後は西方浄土や極

⁽³⁾ 河合隼雄『こころの最終講義』（新潮文庫、2013）、p131。

楽など良いところに行けることを神仏に祈る後世頼みの面との両面を不可欠の要素として持っている信仰生活、信心生活なのである。ただ、どういう神仏に向かって祈り求めるかという対象の違い、どういう宗教的行為や禁忌（タブー）などを含んだ生活を送ればいいのかという若干の習俗の違いによって、自分の属する宗教宗派が異なってくると言ってもよいのである。

（5）祈りを意味する「オラッショ」が9回出てくる。その内容はもっぱら罪を避け、徳を修め、救いに入るためのものである。

田北耕也のこの主張に必ずしも反論するものでないが、潜伏キリシタンにとってのオラッショ（祈り）は、彼らの生活習慣の一部となっており、その文言上の意味で口にしていたというより、一種の呪文として習慣的に唱えていたと考えた方がいいのではないかと、とも考えられる。つまり、同時に発見された当時のオラッショ（祈り）の内容そのままに、彼らが徳を修めようとしていたわけでは必ずしもないのではないかと、考えられるのである。

【『天地始之事』のどの点が注目されたか——谷川健一・遠藤周作・紙谷威広・河合隼雄の場合】

『天地始之事』はこのような全体像を持つわけであるが、これまでこの伝承物語に注目して取り上げ、検討してきた方々は、自分自身の関心に応じて一部の物語ないしエピソードにのみ注目して論じられた場合も少なくない。典型的なものを幾つか取り上げ、どの物語に着目して吟味検討してこられたかを見ておくことにしたい。なお、各人の取り上げ方の詳細については、機会を改めて大テーマ（大物語）ごとに検討する際に見ていくことにするが、ここでは、その物語を取り上げて吟味している（●）、一応着目し触れている（▲）、全く無視している（×）、といった辺りをまず概観しておくことにしたい。

『天地始之事』についての優れた論考としては、これまでに、民俗学者の谷川健一の「バスチャン考」（1969）⁽⁴⁾、作家の遠藤周作の「日本の沼の中で——かくれ切支丹考」（1979）⁽⁵⁾、民俗学者の紙谷威広の「隠れキリシタンの天地始之事」（1978～1985）⁽⁶⁾、ユング派臨床心理学者の河合隼雄の「隠れキリシタンの変容過程」（1992）⁽⁷⁾等が発表されている。

谷川健一は、外海などの地域で潜伏キリシタンにとっての聖者として崇められてきた日本人殉教者バスチャン（キリシタン名セバスチャンのセが脱落したもの）を、キリシタンに根強い殉教志向との関連で検討していく。そして『天地始之事』に描かれた兄妹婚や母子婚といった近親婚のテーマ、また苦しむ神・殺される神といったテーマを、アジアを始め世界各地の民俗学的テーマと関らせて論じる。遠藤周作は潜伏キリシタンの信仰を「許しと包容」の母性的宗教の色彩を持つものとして捉え、そうした視点で『天地始之事』を読み解いていく。紙谷威広は東アジアに共通する感覚や習俗をも視野に入れ、『天地始之事』の各部分を民俗学的に丹念に読み解こうとしていく。河合隼雄はユング的な神話解釈の土台に立って『天地始之事』に新たな視点を持ち込む。

こうした4人各様の読み解き方そのものが興味深いものであるが、ここで先ず問題としておきたいのは、それぞれが『天地始之事』のうちのどの部分に特に目を魅かれたか、ということである。表の形で整理してみたので（紙

(4) 『伝統と現代』に1969年1月号から10回にわたって連載されたものの一部。後に、谷川健一『魔の系譜』（講談社学術文庫、1984年）に収録。

(5) 『野生時代』1979年1月号～6月号に連載、遠藤周作『切支丹時代——殉教と棄教の歴史』（小学館ライブラリー、1992）に収録。

(6) 『東京立正女子短期大学紀要』1978年（6巻）、1984年（12号）～1986年（14号）に掲載したものを再整理し、紙谷威広『キリシタンの神話的世界』（東京堂、1986）として刊行。

(7) 1992年10月31日に京都市社会教育総合センターで講演した記録に加筆修正し、河合隼雄『物語と人間の科学』（岩波書店、1993）に収録。後に河合隼雄『こころの最終講義』（新潮文庫、2013）に再収録。

谷威広の場合には全ての物語について検討を行っているので、この表では省略)、それをまず見ていただきたい。

	谷川健一	遠藤周作	河合隼雄
(1) 世界の創造	×	●	●
(2) 人祖の創造と生活	●	▲	●
(3) ジュスヘルと人祖の失樂園	×	●	●
(4) 大津波とパッパマルジラの生存	●	×	●
(5) 処女マルヤの物語	●	●	●
(6) マルヤの御懐妊と御子御誕生	●	▲	●
(7) 御誕生後の御主と母子の逃避行	×	×	×
(8) 御主の受洗と学問	×	×	×
(9) 御主の仏法論破と弟子達	×	×	×
(10) ヨロウテツが数万の幼子を殺す	×	●	●
(11) 弟子ジュウダツの裏切り	×	×	×
(12) 御主の捕縛と苦難	●	▲	×
(13) 御主の最後の御受難と御死去	●	▲	×
(14) 御主の御出現と御昇天	▲	×	×
(15) 御主ゆかりの人達の天での処遇	▲	×	●
(16) この世の終わりと最後の審判	×	▲	×
(17) 死後の世界と罪の償いの火	×	×	×

この表を見てすぐに気が付くのは、谷川健一と遠藤周作と河合隼雄の関心を持った物語の大きな違いである。紙谷威広が『天地始之事』を全物語にわたって検討し、隠れキリシタンの思想をそれ自体として研究しようとしたのを別にすれば、谷川健一は日本伝統の民俗学的習俗が、どの物語のどの部分に見られるか、という点に主たる関心を持つ。遠藤周作は「神による許し」を中心とした自分自身のキリスト教の捉え方が、日本のキリシタン史を見たときに古い根っこを伝統的感性として見られることを論じるために『天地始之事』を用いる（母性的宗教としての検討に無関係な部分には関心が払われていない）。また河合隼雄は、キリスト教の基本原理である〔父・子・聖霊〕という（母性原理の入っていない）三位一体論でなく、『天地始之事』では〔祖父・母・息子〕に〔母の夫〕が加わった男性原理と女性原理の調和した四位一体的構造が見られるが、これはユング的な発想と同一である、といった主張に典型的に見られるように、ユング流の人間理解の視点からの読み解きの色が強い。いずれにせよ、紙谷威広以外の場合、自分が関心を持つ問題に関係してこない部分は捨て置かれていると言ってよい。

【『天地始之事』の各物語と旧新訳聖書との関係】

最後に『天地始之事』の各物語と旧新訳聖書との関係について簡単に見ておくことにしたい。この物語全体が潜伏キリシタンの教義的な土台となるものであることからいって、その内容の最も土台に旧新約聖書があることは、あらためて言うまでもない。しかし、各物語の内容を検討してみる時、そうした対応関係には明らかな濃淡が存在している。物語によっては、対応するといっても大幅な換骨奪胎と言うべきものもあり、また全く対応が見られず、

まさにオリジナルな内容として見てよい部分も存在している。詳細については各物語ごとに検討を加える際に見ていくことにするが、ここでは主要な対応関係の見られるところを、以下に大まかな形で概観しておくことにしたい。

(1) 世界の創造	旧約聖書「創世記」
(2) 人祖の創造と生活	旧約聖書「創世記」
(3) ジュスヘルと人祖の失樂園	旧約聖書「創世記」
(4) 大津波とパッパマルジらの生存	旧約聖書「創世記」
(5) 処女マルヤの物語	新約聖書「マタイ」「ルカ」
(6) マルヤの御懐妊と御子御誕生	新約聖書「マタイ」「ルカ」
(7) 御誕生後の御主と母子の逃避行	(新約聖書「マタイ」「ルカ」と些かの対応)
(8) 御主の受洗と学問	(聖書との対応関係無し)
(9) 御主の仏法論破と弟子達	(聖書との対応関係無し)
(10) ヨロウテツが数万の幼子を殺す	新約聖書「マタイ」
(11) 弟子ジュウダツの裏切り	新約聖書「マタイ」「マルコ」「ルカ」「ヨハネ」
(12) 御主の捕縛と苦難	新約聖書「マタイ」「マルコ」「ルカ」「ヨハネ」
(13) 御主の最後の御受難と御死去	新約聖書「マタイ」「マルコ」「ルカ」「ヨハネ」
(14) 御主の御出現と御昇天	(聖書との対応関係無し)
(15) 御主ゆかりの人達の天での処遇	(聖書との対応関係無し)
(16) この世の終わりと最後の審判	新約聖書「黙示録」
(17) 死後の世界と罪の償いの火	(聖書との対応関係無し)